

# 通信小海

## 腹話術と

### 子育てのお話

牧師 水草修治

小海キリスト教会では、今月は二つの目玉があります。一つは、楽しい腹話術師が来てくれることです。春風マリヤさんの弟子にあたるご婦人で、私たち家族にとつてとてもたいせつな人、橋本綾子さんです。綾子さんはご主人と人形のマー君といっしょに仙台に暮らしていらっしやいますが、このたびこちらを訪ねてくださることになりました。

私も家族と橋本御夫妻とのお付き合いはもう二十年にもなります。マー君が登場してから十五年ほどでしょうか。マー君がはじめてカバンに入って教会にやって来たとき、小さな子どもたちはみんな目をまん丸くして不思議そうに見ていました。マー君がこあいさつをしてお話を始めると、子どもたちの目はキラキラ輝きました。そして、マー君が帰るとき、またカバンに入れられるのを見て、子どもたちはちょっと心配そうでした。「暗くて怖くないのかなあ。息がくるしくないのでのかなあ・・・。」

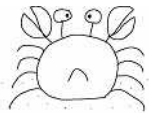
〈今月の御言葉〉  
「あなたがたの思い煩いをいっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。」第一ペテロ五：七

き、小さな子どもたちはみんな目をまん丸くして不思議そうに見ていました。マー君がこあいさつをしてお話を始めると、子どもたちの目はキラキラ輝きました。そして、マー君が帰るとき、またカバンに入れられるのを見て、子どもたちはちょっと心配そうでした。「暗くて怖くないのかなあ。息がくるしくないのでのかなあ・・・。」

### マー君がやってくる集会は、

七月十三日(日)朝十時から十一時半です。

マー君はこの集いのなかの子どもメッセージという部分が出番です。さて、今回はどんなお話なのか、私も楽しみで首を長くしています。



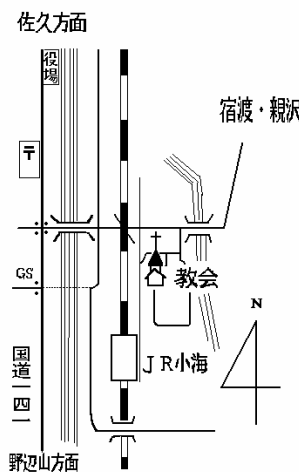
日本同盟基督教団小海キリスト教会 牧師 水草修治

会堂・牧師館 南佐久郡小海町大字小海四三三五 二七

千三八四一一 二二 二六七九二四七七六

〒振替005300 61683

## 見晴台の教会へどうぞ



### 集会あんない

日曜日 朝礼拝 午前十時から十一時半

夕礼拝 午後八時から九時

\*海尻・川上・南相木で毎月家庭集会をしています。

\*個人的な聖書勉強や個人的なご相談にも乗ります。

小海キリスト教会の七月のもう一つの目玉は、辻浦定俊先生による聖書からの子育てに関するお話です。辻浦定俊先生は、四十一年間の長きにわたって埼玉の「杉戸愛児園」で園長先生をなさっていらつしやいました。先生の素朴で飾らないお人柄、謙虚でやさしく、そして時にきびしく語られる真実のことは、何度励まされ、また何度目を覚まさせられたでしょうか。

「ご高齢の先生は、「これが自分にとつて皆さんにお話ができる、最後のチャンスであると考えて、お話しします。」とおっしゃいますが、とてもそんな歳とは思えないほどお元気で、剣道の有段者でいらつしやいます

今の時代、子どもたちは、高価なゲーム機、パソコン、携帯が与えられたり、信じられないような金額のお年玉をもらえたりしています。親の、なんとか我が子に幸せになって欲しいという気持ちは同じです。にもかかわらず、現代は子どもにとって受難の時代だなどとも言われます。いたい、私たちは何を見失っているのでしょうか。いったい、私たちに何が必要なの

しょう。

情報が多すぎて、かえって混乱してしまう時代の中で、辻浦定俊先生のお話は、あなたにほんとうに興味のある子育ての知恵と力になるでしょう。

## 辻浦定俊先生のお話

七月二十日(日)朝十時から十一時半

どちらの集いも席上で自由献金があります。



## 海尻で家庭集會

七月十七日(木)午後七時四十五分から

井出博彦さん宅で。 96 2534

## 南相木でも家庭集會

七月二十三日(水)午後三時から

日向の中島悦子さん宅です。どなたもどうぞ。 78 2047

## 配食数増加に転ずー野宿者支援

一月から五月までの配食数

新宿(15742食 前年比886食増)

上野(2911食 前年比167食増)

浅草(6220食 前年比1880食増)

お米の受付状況(1月～5月)

・1882・4キロ(長野県内から)

・627・8キロ(長野県外から)

お米の提供先(1月～5月)

・山谷労働者福祉会館に360キロ

・新宿連絡会に 2130キロ

・ほしのいえに863・5キロ

△送付先▽小海キリスト教会にお持ちくださるが、

南牧村社協へ。

〒384-1302南牧村大字海ノ口966 1

5南牧村社会福祉協議会気付 山谷農場

\*着払いによる送付はご遠慮ください。荷札に

「木曜午後送付希望」とお書きください。

山谷農場事務局(藤田 寛)小海町芦谷ヒルサ

イドコーポ 一二号室毎週金曜土曜はあります。

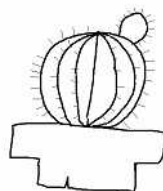
電話090・1436・6334

〒384-1302・786・2088

メール nyoro@beige.ocn.ne.jp

アブラハムの生涯

# いのちがけの約束



さあ星を数えよ

メソポタミアの王たちの連合軍はほうほうの体で去っていった。それから数日後の深夜、アブラムは揺れるともし火を見つめながら自分の天幕のなかで思いを巡らしていた。

「ロトは、今度の戦争で懲りて、もはやソドムの町に住むことをやめるのかと思っていたが、咽もとすぎればなんとやらか・・・。メソポタミアの王たちが雪辱を期して再来せぬともかぎらぬのに、さてさて心配なことだ。」甥のロトは、アブラムに救出されると、性懲りもなく再びソドムに住むようになったのである。

しかし、甥のロトのこと以上にアブラムの心を塞がせていたのは、自分と妻サラの年齢のことであった。神の約束を受けて、故郷を旅立ったとき、アブラムは七十五歳、妻は

十歳下であった。あれからすでに数年がたっている。神はアブラムから偉大な国民が出現すると約束され、夫婦それなりに努力もしているが、いまだサラにはその兆候はない。無理もない。夫も妻も年齢が年齢である。

エジプトで思いがけず富を得て、また今回の戦いの勝利でこの地での名譽をも得ることができた。けれども、どれほど富があるうと、どんな名譽を得ようと、いまさらこの年寄りになんの役に立とう。アブラムは「世継ぎとなる子どもがいなければ、すべて無駄になってしまふ。わが家の筆頭のしもべエリエゼルに相続させるほかあるまい。」とつぶやいた。と、突然、アブラムの鼓膜を内側から主なる神の音が打った。

「アブラムよ。恐れるな。わたしはあなたの盾である。

あなたの受ける報いは非常に大きい。」アブラムは答えた。

「神よ。私に何をお与えになるのですか。私にはまだ子がありません。私の家の相続人は、あのダマスコのエリエゼルになるのでしょうか。」すると、声は言った。

「その者があなたの跡を継いではいならない。ただ、あなた自身から生まれ出てくる者が、あなたの跡を継がなければならない。天幕から外に出よ。」

神の声にしたがってアブラムが外に出ると、さらに声は続いた。

「さあ。天を見上げよ。星を数えることができるなら、それを数えるがよい。」

見上げると漆黒のピロードに惜しげもなくばらまかれたダイヤモンド。アブラムの口から思わずほうつとため息が出た。数えられるわけがない。すると、声は言った。

「あなたの子孫はこのようになる。」

アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。自分も、妻のサライも枯れかけた老木だ。だが、そもそも主は、万物にいのちを賜っているお方である。そのお方が、ご自分の作品である星空を見せて、あなたの子孫はこれほどに増えると仰せになるのである。ほかの誰でもない、このお方の約束なのだ。アブラムは、信じた。

主なる神は、アブラムの信仰をお喜びになった。そして、聖書は、「神はアブラムの信仰を義と認められた」という。「義と認める」

というのは、聞きなれない表現であろう。聖書で「義」というのは、神と正しい関係にあるということの意味する。だから「主がアブラムを義と認めた」というのは、神はアブラムが神と正しい関係にあることを承認なされたということである。

普通に考えれば、子どもが生まれることを期待できる状況ではまるでなかった。しかし、信じうる有利な状況がないにもかかわらず、アブラムは子が与えられると信じた。なぜなら、この約束をくださったお方がほかならぬ真実な神であったからである。その主のことばにアブラムは賭けた。ここに、アブラムが「信仰の父」と呼ばれるようになった理由がある。



いのちがけのしるし

また、主はさらにアブラムに約束された。「わたしはこの地をあなたの所有としてあなたに与える。」

するとアブラムは「神、主よ。それが私の所有であることを、どのようにして知ることができましょう。」と答えた。すると、主は

アブラムに命じられた。「ここに三歳の牝牛と、三歳の雌やぎと、三歳の雄羊と、山鳩とそのひなを持ってきなさい。」アブラムは言われるとおりにして、これらを二つに裂いて向かい合わせにした。これは当時のオリエント社会での契約の様式だった。

約束をする者は、もしこの約束を破ったならば、自分はこれらの動物たちのように二つに引き裂かれてもよい、という意味で、これら引き裂かれた動物の間を通り過ぎて見せるのである。

アブラムはこれから何が起るのかと待っていた。日が西の山に落ちると、主の声があった。「あなたはこの事をよく知っていないさい。あなたの子孫は、自分たちのものでない国で寄留者となり、彼らは奴隷とされ、四百年の間、苦しめられよう。しかし、彼らの仕えるその国民を、わたしがさばき、その後、彼らは多くの財産を持って、そこから出て来るようになる。あなた自身は、平安のうちに、あなたの先祖のもとに行き、長寿を全うして葬られよう。そして、四代目の者たちが、ここに帰って来る。それはエモリ人の咎が、そのときまで

に満ちることはないからである。」

そのとき、アブラムの目の前に煙の立つかまどが出現した。見ていると、不思議なことに燃え盛る炎は、あの二つに裂かれたものの間を通り過ぎて行くではないか。ようやくアブラムは、この出来事の意味を悟った。

「主よ。あなたはご自分の約束を、ご自身の命をかけて守ってくださいとおっしゃるので、すか……。悟らない私にわかる見える方法で、この約束のたしかさを証してくださいだったので、すか。」

アブラムは震えるような思いで裂かれたものの間をすぎてゆく不思議な炎 神の臨在を見つめていた。

事実、アブラムの孫ヤコブの代にアブラムの子孫はエジプトに移住して寄留者となり、四百年後、紀元前千五百年モーセの時代にエジプトを脱出してこの約束の地に帰ってくるようになる。主の約束は、数百年の後に成就したのである。

「私たちは真実でなくても、彼は常に真実である。彼にはご自身を否むことができないからである。」第二テモテ二：十三